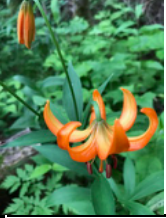


題材法話

前号からのつづき

曇鸞大師さまは「惠姑春
秋を識らず、この虫、あに
朱陽の節を知らんや」と、
つまり「蝉は春や秋という
季節を知らないどころか、
夏という季節も知らないの
だ」と仰ります。蝉が「な
ぜ夏を知らないのだ」と、
ちよつと思議ですが、実
は大変に的（まと）を得た
ご指摘なのです。
曇鸞大師さまのつぎの言
葉、「知るものこれをいう
の、つまり、春や秋や冬とい
う季節を知っている者が始
めて、「ああ、夏が来た！
今が夏という季節なのだ」
と分かるのです。
夏に生き、夏しか知らな
い蝉にとつては、「今が夏
ことさ、えも分らないの
す。」
蝉にとつては、夏とい
う季節が全てであ
り、この世はこ
のような季節が
全てなのだと思



いこの曇鸞大師さまのお諭
しは、大変味わい深いもの
があり、ます。
○凡夫の世界
てみますと、煩惱具足の凡
夫と呼ばれる私達が、けつ
して迷いの世界にいること
に気付かないことと通じる
のです。
私達は、蟬に比べると、
何百、何千倍もの寿命を頂
いており、四季というものを
は知っており、哀れさが分か
ります。
宇宙の広さや、何億年と
も知れない宇宙の寿命から
考えますと、私達の人生も
蟬とほとんど変わらない存
在だといえるのです。
私達の生涯などは、宇宙
の寿命から見れば「あつと
いう間」に過ぎ去つてしま
う人生なのです。
いかにもその短い人生にお
いて、地球における人間と
いう世界でしか
見る、ことができ
ず、世界を中心に



「損だ得だ、好きだ嫌いだ
、あれが良いこれが悪い」
と、悩み苦しむ、一生を過
ごしているのです。
○苦惱の旧里はすてがたく
私達が蟬の世界を見て哀
れに思うように、実は全て
の世界を見渡すことの出来
る仏さまから見れば、私達
の存在というのは、「はか
なく、哀れな存在」になる
のです。
にもかかわらず、歎異抄
に、「久遠劫よりいままで流
転せる苦惱の旧里はすてが
たく、いまだ生まれざる安
養浄土はこひしからず」
と、しめされるところ、
「苦悩多くともこの世は去
りがたいし、安らかなはず
のお浄土へは、思わぬ急い
で行きたいとは思わぬ」
のです。
これが当に、「まことに
よくよく煩惱の興盛（こう
じょう）に候ふにこそ」と
いう煩惱具足の凡夫の姿な
のです。
○阿弥陀様の誓い
曇鸞大師さまが



いうのみ」と仰られるよう
に、私達人間の知恵では知
ることの出来ない世界であ
るならば、その世界を知つ
ておられる方の言葉に順う
しかないのでしょうか。
その言葉こそがお釈迦様
の言葉であり、「南無阿弥
陀仏」という阿弥陀様の呼
び声なのです。
阿弥陀様は私達の一生を
はかなく終わらせたくない
と四十八の願いをお立てに
なれば、その願いがかなわ
なければ自らも悟りを得る
ことはないと誓われ、そし
てその救いの世界を完成な
されたのです。
人としての私達の一生を
「春秋を知らないはかない
一生」とするか、
人としてのいのちを頂いた
ことの「最大の意味を知らさ
せて頂く」のか、
このことは本当に大事な分
かれ目になるであろうと思
います。
平成二十八年度
梅鶯仏壮総会
住職法話より

